

学級活動におけるモジュール活動の導入に関する一試案

ーフレキシブル・アワーの設置を通してー

Empirical Study of Classroom Activities from a Module

ーFocused on Establishing a Flexible Hour Policyー

長谷川 重 和

要 旨

本稿の目的は、特別活動の活動時間を生活時程のなかに位置づけ、その活動目的や内容を共通理解し、主体的な学びや適切な指導を展開させるために試案を示すことである。教育現場では確かな学力を身につけることが優先され、学校行事を精選するなどして教科学習の時間を確保してきた。結果として学校裁量の時間に占める特別活動の時間は縮減され、学校行事や児童会活動などの学習課程や活動内容も変化してきた。特別活動は、児童のよりよい人間関係を築く力や問題解決力の育成を目指しており、たとえ活動時間が縮減傾向であろうともさらに充実を図らなければならない。

特別活動に係る教育現場の意見や資料から現状を知り、「特別活動における活動時間の不足」と「教師の指導力格差」の課題に焦点をあてる。「活動時間の不足」の対応策のひとつは、日常的に行われる児童会活動などに対して弾力的に対応できる「フレキシブル・アワー」を設置することである。それにより児童は、特別活動の目標にそった活動を目的的な活動時間の中で計画的に展開できるようになる。もうひとつは、「フレキシブル・アワー」の中に学級活動を支える活動の時間「モジュール活動」を導入することである。これは、生活時程を工夫したり活動内容を明確にしたりすることにより学校の裁量時間内で実施することになる。学級担任は、「モジュール活動」のひとつとして“よりよい人間関係”を育成するグループワークを計画的に実施する。そのためには、児童の実態を観察し指導過程や指導案を学年チームや学年間で作成しなければならない。このようなチームでの協働作業は、教師の指導力を高めるとともにカリキュラムマネジメントを意識することにつながる。

キーワード：学級活動 モジュール活動 人間関係 学級経営

はじめに

学習指導要領改訂を目前にして、子どもたちのおかれている社会環境は、平成20年の改訂時よりもグローバル化や情報化などが加速度的に進化し、将来の予測が困難で複雑化している。子どもたちは、自分の考えを述べたり解釈・考察して説明したりする表現力が十分でないと指摘され、自己肯定感や主体的に学習に取り組む態度や社会参画の意識等がOECD各国でも低位にあると報告された。そして教育現場では確かな学力を身につけることが優先され、学校行事を精選するなどして教科学習の時間を確保してきた。特別活動は、自己肯定感や主体的に学習に取り組む態度、社会参画の意識の醸成に期待できる領域だけに、活動時間が縮減の傾向にあるのは好ましい状況ではない。

小学校特別活動の目標は、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築いていこうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方について考えを深め、自己を生かす能力を養う」である。現行学習指導要領から目標に「人間関係」を明示したのは、特別活動がよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる教育活動であることを明確にするためである。その目標を達成するための要は学級活動である。学級活動の目標に人間関係の形成が明示されたが、不登校やいじめなどの事案が問題化するたびに、「望ましい人間関係」の在り方が問われてきた。学級活動は、個別指導だけでなく集団を意識した学校生活の向上や生徒指導の充実などに役割を果たしている。学級担任は、集団活動を通して人間関係の大切さを気づかせ自治的な学級を目指している。自治的な学級の人間関係は、学級活動の充実が図られ、活動時間が保障されてこそ肯定的に展開するのである。

本論では、特別活動が活動時間の縮減傾向にある現状を踏まえ、生活時程や指導方法を工夫することで学級活動をいかに充実した時間にするのか、次のように提案する。①特別活動を補完するフレキシブル・アワーの設置②学級活動を支えるモジュール活動の導入③望ましい人間関係を形成するための具体的な活動計画である。

1 教育現場における特別活動の課題

(1) 活動時間の不足

ア「豊かな心を育む教育の在り方に関する専門部会に係る意見」から

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において示された意見が、「豊かな心を育む教育の在り方に関する専門部会に係る意見」¹⁾として公開されている。そこには教育現場で特別活動に取り組んでいる教師の願いや次期学習指導要領への期待が述べられている。この意見から特別活動の重要性を改めて確認するとともに教育現場が直面している課題を取り上げる。まず、特別活動の活動時間についての意見である。

「学校は必須として『社会性の育成』の場を多く設定し、特別活動の時間を増やし、集団活

動からしっかりと学ばせることが最重要である。子どもたちには地域社会や家庭から社会性を育成できることも考えられるが、学級や学年という集団から活動を通して社会性を学ぶことが先決である。教育現場の教師はひと昔前と比べ、学級活動、児童会活動、学校行事でも『子どもたちのペースで考え、活動している時間が短くなっている』と感じている。学級活動で計画を立てる際は、休み時間や昼食の時間を有効に活用している状態である。子どもたち側から見れば、果たしてこれで良いのか疑問が残る。社会性の育成を行うために、今までどおり特別活動を教育課程にきちんと位置づけ、子どもたちに考えさせる時間の確保や集団活動ができる時間を増やして欲しいと願う」

この意見は、特別活動における2つの課題を示している。ひとつは、教育現場の教師が学級活動、児童会活動、学校行事の活動時間が短くなったと感じていることである。意見の後半に「特別活動を教育課程にきちんと位置づけてほしい」との願いもあるが、特別活動の時間は教育課程の基本的な枠組みとして学習指導要領に明示されている。その授業時数は、年間35時間で、学級活動（学校給食に係るものを除く）として生活時程に明記されている。しかし、学級担任は「活動している時間が短くなっている」と感じている。それは、学級活動以外の特別活動（児童会活動、クラブ活動、学校行事）が、十分な活動時間として確保できていないのではないかと推察する。確かに“行事の精選・厳選”という名の下で、学校行事や児童会活動、クラブ活動の時間の見直しが図られてきた。“確かな学力”の定着を最優先として教科学習の時間数を確保しなければならない状況のなかで、特別活動の時間をさらに捻出するのは至難の業である。

全国連合小学校校長会の報告²⁾によると、確かな学力を確立するために実施している工夫は、「毎日15分程度の帯時間や60分授業を日課表に位置づける」取組が全国の小学校での22,8%実施されている。表1に示したように、帯学習として読書活動と漢字や計算などの短時間学習が展開している。児童は決められた時間になると静かに本を読み、計算や漢字などの反復学習を毎日行うことになる。このような朝の活動が多くなる以前は、学級ごとに「朝の会」が行われ、一日の目標を決めたり係活動からの計画を発表したりする児童主体の話し合い活動が行われていた。「朝の会」は現在も大切にされているが、表1のA小学校例のように1時間目の授業までの5分程度となり、出欠確認や教師からの連絡で終わることになる。「朝の会」が形骸化しないためには児童主体の運営が不可欠で、担任による指導と適切な時間が必要になる。如何に生活時程を工夫し指導時間を確保するかは、学校の裁量に任されている。

さらに驚くことは「行事をさらに精選する」小学校が全国の62,9%答えたことである。このように特別活動の時間を削減するという状況に追い込まれた学校は、学級経営の基盤となる学級活動にも少なからず影響がでてくると推察できる。そのことが前述した教師の意見からも伺える。特別活動の重要性を意識している教師は、「このまま何も工夫しないで主体的な活動の時間を削減し続けていいのか」という疑問を感じつつ、何とか活動時間を確保したいと考えている。

表1 朝の活動（A小学校例）

時 程		月	火	水	木	金
登校：準備	8:15～8:2	準備	準備	準備	準備	準備
帯学習（全校）	8:25～8:35	全校朝会	読書	児童会集	読書	読書
帯学習（学年・学級）	8:35～8:45	学校行事	計算	会活動	漢字	英語
朝の会（担任連絡）	8:45～8:50		朝の会		朝の会	朝の会
1時間目	8:50～9:35	授業	授業	授業	授業	授業

（※月曜日と水曜日に集会活動が無ければ、各学級において通常時程で活動する）

もうひとつは「子どもたちが計画を立てる時間は、休み時間や昼食の時間を活用している」という実態である。たとえば、学級活動の話し合いの時間（学級会）で「お楽しみ会」を開催することが決まったとする。児童はそれに向けて準備や係活動を展開することになるが、それらの活動は、学級活動の年間計画（年間35時間）に位置づけられていない。それは、教育課程外の時間であり学校長が決定する「学校裁量の時間」を活用することになる。教育課程の時間数に余裕があった時期では、学校行事の準備などは放課後の時間を活用していた。現行指導要領では、6校時の授業日が多くなり放課後に特別活動の指導ができないなど生活時程に余裕がなくなっている。さらに下校中の安全面を考慮し、下校時刻の厳守や繰り上げを促しているのが現状である。したがって児童が学級活動として主体的に活動する時間は、休み時間や昼休みの時間に限られてくる。このように特別活動に係る活動が休憩時間の併用として常態化すると本来の目的が不明瞭になる。児童は、学校生活にメリハリがなくなり、自治的な学級や生き生きとした人間関係の形成に影響するのではないかと危惧する。

また、「子どもたちのペースで考える」というのは、児童の発達段階や学級の集団過程により、活動に要する時間が異なることを意味している。学級は最初の段階ではどうしても時間がかかることになる。「子どもたちに考えさせる時間の確保」ができなくなると、教師主導の活動になり、学級活動の基盤になる自主的、自治的な学級経営は難しくなる。「集団活動ができる時間を増やして欲しい」という意見は、休み時間や昼休みの時間に児童に任せる放任的な活動ではなく、集団による活動時間を計画的に確保して、教師がかかわり支えながら自治的な学級を築きたいという教師の願いの表れである。

イ「特別活動の改善に関する調査報告書」から

特別活動が現行教育課程においてどのような実践状況であるかについて提示したのが「特別活動の改善に関する調査報告書」³⁾である。本報告書は、平成24年の8月から9月までの調査をまとめたものであり、調査対象は日本特別活動学会会員、全国特別活動研究会会員、小中高の教師である。1167名に調査依頼し回収率は27.2%であった。調査分析の結果、回答者全数の結果と校種別の調査とではかなりの差異が見られるので、校種別教師の回答に基づく調査が実態に近いと考えられている。いずれにしろ、前述した「豊かな心を育む教育の在り方に関する専門部会に係る意見」を客観的に裏付ける資料であると考ええる。

まず学級活動に関する質問であるが、「小学校の学級活動において児童は意欲をもって参加している」と回答したのは94,4%であり、学級活動が教師にとって特別活動の中核的な役割として肯定的に捉えていることが分かる。ほとんどの教師は、児童の意欲を引き出し学級活動に参加させていると感じている。ところが、学級活動の指導における問題点を聞くと、教育現場の様子が浮かび上がってくる。

たとえば、「時間不足で十分に課題を深めることができない」の項目である。小学校関係者の72,6%が、時間不足に対して「かなりそう思う＋ややそう思う」と回答している。学級活動は、学級生活の課題を解決する時間としての役割を果たしているが、7割以上の教師が時間不足を感じている。そして「あれもこれもと課題が多すぎる」と回答したのは、57,6%（かなりそう思う＋ややそう思う）で、児童が主体となり課題を解決する学級活動は時間不足であると同時に課題が多くなっている現状が見えてくる。さらに拍車をかけるように「教科の時間が重要と考え、軽視してしまう」が57,9%（かなりそう思う＋ややそう思う）と半数以上の関係者が答えている。この時間不足の問題は、現実的な時間数の縮減と課題の増加に加えて、特別活動を教科指導より軽視するという意識の面からの問題点も見えてくる。このことは前述の意見を客観的な視点で見ることができる資料のひとつだと考える。

（２）教師の指導力格差

ア「豊かな心を育む教育の在り方に関する専門部会に係る意見」から

小学校学習指導要領において、「日頃から学級経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深める」と記されているように、良好な人間関係を基盤にした学級経営や児童理解が重要になっている。特に学級活動は児童にかかわる時間が長く、その指導のあり方によっては特別活動の目標達成を左右することになる。そして、学級崩壊やいじめなどの教育課題が問題になると、学級内におけるよりよい人間関係の有無がクローズアップされ、教師の指導力も問われることになる。

教育現場からの具体的な意見を「豊かな心を育む教育の在り方に関する専門部会に係る意見」から教師の指導力の重要性について述べる。まず意見の一例を示すと、「人間として認め合い、よい人間関係を築くための活動を展開していく学習活動として、特別活動は最適なものだと思われま。学級会等の活動は、自分なりに友だちとの協調を考え、他の子への思いやりが徹底となる活動が積み重なっていきます。家庭や地域での生活を見ても、多くの子どもが集団で過ごすことは少ない状況です。学校に来て、教科の授業や放課後だけでは、教師が意図的に対人関係を高める活動を組み立てていくことが困難です。異年齢集団活動も思いやりの心を育てるのには最適な活動だと感じます。また、その活動を通して学級集団も高まるという実感も多くあります。以上のように特別活動の重要性を感じ、日々実践に心がけています」である。

この意見から分かることが二つある。まず、特別活動は「児童が認め合い、よい人間関係を築くための活動を展開していく学習活動だ」という意見である。特別活動は「なすことによっ

て学ぶ」を基本理念としているが、ただ体験が優先するのではなくその体験から何を学ばせるかということが大切になる。経験豊かな教師は、「まず経験をさせ、児童の主体性に任せることが肝要である」と指導場面で若手教師に伝える。その言葉の裏には、児童の問題意識を高める事前指導があり、児童の思考過程を大切にする指導過程があることを理解しなければならない。特別活動の指導資料⁴⁾では学級活動（２）における指導過程を、「つかむ」「さぐる」「見つける」「決める」と示しており、事後指導において目標実現への意欲を高める手だてを展開することになる。このように、特別活動は、体験を重視する活動であるが、児童に任せるだけでなく、教科指導と同様に“学習活動”であることの意識を深め、指導過程を大切にしている。教師は、事前事後も含めた指導過程を理解して実践するための指導力を高めることになる。残念なことに、学校行事の指導で、児童のやる気や情熱の有無だけを問う場面に出会うことがある。それが必要なときもあるが、教師は児童の主体的な活動を指導できるスキルを身につけ、指導案を作成し学習課程を意識して、特別活動を学習活動として展開しなければならない。

もうひとつは、「教科の授業や放課後だけでは、教師が意図的に対人関係を高める活動を組み立てていくことが困難」という意見である。教師は、児童にコミュニケーションのスキルなど身につけさせ、よりよい人間関係を促進することで肯定的な学級の雰囲気を醸成したいと願っている。ところが教師の指導の仕方によっては、特別活動の指導の特質を踏まえない一方的な指導になることがある。対人関係を高めるかかわり方の指導は、経験豊かな教師・指導力のある教師とそうでない教師のとの違いがでることもある。そのようなケースをできるだけ少なくし、どの教師にも望ましい人間関係を形成できる場を確保し、指導力を発揮させなければならない。そのためには、生活時程に学級活動の時間を確保すると同時に、対人関係を高める活動を焦点化し、望ましい人間関係を形成する具体的なスキルを提示しなければならない。

イ「特別活動の改善に関する調査報告書」から

「特別活動の改善に関する調査報告書」において、小学校関係者が「各学校の特別活動は十分行われている」という設問で、（かなりそう思う＋ややそう思う）が34,7%であり、（十分に行われていない）が64,3%と回答している。このことを裏付ける質問項目として「最近、特別活動についての教師の指導力が低下している」とする回答が、76,3%あった。この指導力低下の問題は、経験豊かな教師の大量退職を補う新任教師の採用など指導者の激変が一因であると推察できる。重要なことは、経験豊かな教師の経験知を特別活動の充実に向けてどのように次に世代に伝えるかということである。

教師は、教科領域において全ての児童に教科書でその内容や学習方法を教えることになる。学級担任がかかわっても大きな違いは認められない。しかし、特別活動には教科書がなく、教師が先輩教師の指導を見て学ぶというOJT（実践研修）的な側面がある。担任の特別活動への意欲や指導方法によっては、学級集団としての雰囲気や関心度に大きな違いがでることもある。新任教師のなかには「教科書がなく、指導内容が明確でないのでやりにくい」という声も聞こ

えるが、調査報告書においても47,5%の教師が（かなりそう思う＋ややそう思う）と回答している。新任教師だけで無く約半数近くの教師がそのように感じていることが分かる。

さらに具体的な質問項目を見ると、「特別活動でコミュニケーション能力を具体的に指導したい」（かなりそう思う＋ややそう思う）で82,6%の小学校関係者が具体的な指導を望んでいる。反対に（全くそうは思わない）割合は、1,9%でありコミュニケーション能力の育成をほとんどの教師が望み、その指導方法に関心があると考えられる。

これらの資料は、前述した「どの教師にも望ましい人間関係を形成できる場を確保し、指導力を発揮させなければならない。そのためには、生活時程に学級活動の時間を確保すると同時に、対人関係を高める活動を焦点化し、望ましい人間関係を形成する具体的な教育スキルを提示しなければならない」という考えを支持している。

また、小学校学習指導要領解説では具体的な指導内容として『『望ましい人間関係の形成』を示していることを踏まえ、それらの活動場面を効果的に取り入れるなどの関連を図り、全体として望ましい人間関係を築く態度の形成が図られるようにすることが大切である』と述べている。教師は、「望ましい人間関係の形成」を指導する時間を工夫することによって、効果的な学習過程を展開しながら学級経営に取り組んでいる。

本章では特別活動の課題に関する意見や報告書をもとに二つの課題を確認した。これらのことを踏まえ、次の視点で具体的な試案を示す。

ひとつは「活動の時間不足」の課題に対する工夫である。特別活動の時間が縮減されている問題をどのように工夫し、充実した活動に変えるかということである。学級活動において自主的自治的な活動をいかに支えるか、いかに活動時間を捻出するかという提案でもある。具体的には、教師のねらいと児童の活動目的が合致する時間になるよう工夫し、生活時程を多様な使い方に対応する「フレキシブル・アワー」の設置を提案する。

もうひとつは「指導力格差」の課題に関する提案である。学級活動（１）の実践を支える時間としてモジュール活動を導入し、教師が児童とともに学級活動を支える時間とする。また、学級活動（２）の展開を充実させる役割として望ましい人間関係を築く契機となり、学級の基盤づくりをするグループワークを計画的に導入する。また、指導力格差の問題は、モジュール活動を全ての学級や学年で計画的に実施することを通して、指導に対するスキルや意識が高まり、解決に向けたひとつの契機になる。教師集団は、同じ目的を目指し相互協力体制を進めることで肯定的なコミュニケーションネットワークを活発にさせる。教師は、指導内容を話し合ったり、指導案を作成したりすることで、一定の指導スキルを確保することになり、指導力の高まりや指導格差の縮小につながると考える。

2 フレキシブル・アワーの設置

(1) フレキシブル・アワーとは

休憩の時間は、各学校の生活時程に明記されている。その設置の根拠は、小学校学習指導要領第1章総則第3の授業時数の取り扱いであり、その内容は「給食、休憩などの時間については、学校において工夫を加え、適切に行うことができる」⁵⁾と規定している。

小学校では、一般的に1時間目と2時間目の休憩時間を「業間」と呼んで、その時間を15分から20分間と長く設定することが多い。休憩の時間設定は、学校によって異なり活動内容も一律ではない。学習指導要領では休憩時間を各学校の工夫に委ねており、学校は休憩時間の在り方や目的を明確にし、計画的に活動する時間として提示することになる。

前述した特別活動の課題を踏まえ、児童の活動時間と主体的な活動を保障するためには、目的や状況に応じて弾力的に活用できる「業間」を設置することを提案する。その時間は、“弾力的に対応する時間”という意味で「フレキシブル・アワー」と呼び、次のような特徴をもって構成する。

- ①フレキシブル・アワーは、特別活動全体の補完的な役割をもつ。
- ②フレキシブル・アワーは、目的や状況に応じて弾力的に対応し、多様な活動が計画的に実施できる。
- ③フレキシブル・アワーは、30分間とし2つのモジュール時間（15分）で構成する。
 - ・学級活動を支える役割の時間 ・休憩の時間（自由遊び）
- ④フレキシブル・アワーの活動内容は、3つに分けられる。
 - ・集会活動や児童会活動など（特別活動全体の補完的な役割）
 - ・モジュール活動 （学級活動を支える役割）
 - ・自由遊び （休憩、児童の自主的な活動）
- ⑤教師は、児童理解を深めるための時間や生徒指導の時間として活用する。
- ⑥フレキシブル・アワーの目的や内容、活用方法は教職員間で共通理解する。

表2は、フレキシブル・アワーが目的や状況によって変わることを示している。たとえば、学校行事や児童集会活動が定期的に計画されると、生活時程を変更することなく月曜日と水曜日のフレキシブル・アワーで実施できる。また、児童集会等の準備は前日までのフレキシブル・アワーを計画的に活用できる。学校行事や集会活動が予定されないときは、30分の自由遊びや自主的な活動が展開する。フレキシブル・アワーの導入により、児童の学校生活にメリハリが生まれる。また、授業時間を変更して行事を実施しないので授業時間の確保にもつながる。火、木、金曜日については、学級活動（1）（2）との関連を持たせている。これは後述するが、学級担任が学級経営を行う上で要の活動時間になる。

表2 フレキシブル・アワーの活動内容と週予定

	月	火	水	木	金
モジュール活動 〈15分間〉	学校行事	学級活動（２） グループワーク	児童会集会 活動	学級活動（２） グループワーク	学級活動（１） 計画委員会
（集会が無い時）	（自治活動）	モジュール活動B	（自治活動）	モジュール活動B	モジュール活動A
休憩〈15分間〉	（自由遊び）	自由遊び	（自由遊び）	自由遊び	自由遊び

（２）特別活動の補完的な役割

フレキシブル・アワーは、表2のように特別活動全体の補完的な役割を果たしている。特別活動の領域で学校行事や児童会活動が計画されると、学年によっては実施時間が問題になってくる。全校生が共通して集合できるフレキシブルアワーは、集会活動や避難訓練などの対応も可能になる。児童会活動では、計画委員を中心とした行事に対する準備活動の時間となり、児童会担当教師は児童の自治的な活動を支援できる。また、学級担任は、不登校ぎみな児童や問題をかかえた児童に対する生徒指導も視野に入れておりこの時間を活用して適切な個別対応ができるようになる。

この提案は、特色のある学校として教育実践したB小学校の取組を参考にしている。業間の休憩時間を40分間（パワータイムと呼んでいる）とし、多様な児童会活動や特色を活かした活動を実践した。⁶⁾ 10年間実践した成果を創意工夫の視点として次の4点を示している。

①パワータイムは、児童相互の活動や教師と児童の交流を促進する。その結果、自発的・自治的な活動が定着する契機になる。（特別活動のねらいと活動時間の確保）

②パワータイムは、学校全体の集会活動や異年齢集団活動の活動時間として確保できるので、他教科の時間を減じることなく目的に応じた企画ができる。

（目的的な活動の展開）

③パワータイムでは、児童との多様ななかかわり展開するので、観察や児童理解が深まりいじめや不登校などの問題行動に対して適切な対応でき早期対応・早期解決につながる。（教師の迅速な適時指導）

④パワータイムで共通プログラムを実施すると、集団指導の方法や成果を交流し学校チームとしての意識が高まる。結果として指導方法や指導技術を相互に高め合いことになり教師力の向上に資する。（全教師の指導力や資質の向上）

このようなB校の成果は、与えられた教育環境を基盤に児童の主体的な活動の積み重ねた結果であるが、特別活動における主体的な活動の方向を示唆している。提案したフレキシブル・アワーは、時間の使い方をより具体的かつ計画的に示すことで、特別活動全体の補完的な役割として期待できる。前章で述べた特別活動の課題“活動時間の不足”であるが、フレキシブル・アワーのように目的的な時間の設定や効率的な用途の工夫など教育課程の編成を鑑みて、様々

な教育課題に組織的に対応することが求められている。

3 モジュール活動の導入

(1) モジュール活動とは

有村⁷⁾は、「時間不足の解消は可能か」のなかで熱意を持って指導する学級教師を次のように紹介している。「学級活動の時間を中心に、特に学級づくりや生徒同士の人間関係の問題等を道徳と朝の会、帰りの会を統合的に組織化している。これは、教科・領域の枠を超えた取組であり、時には総合的な活動の時間と関連づけることもある。これからの特別活動の在り方や改善の方向性を考えるうえで参考になるが、教科の特性が明確でなくなるという問題点も残る」

したがって教育課程で決められた特別活動（年間35時間）の枠ではなく、教育課程外の時間で教師が目的的に活用できる時間を設置する。いわば、学級活動を支える時間の確保である。フレキシブル・アワー内における学級活動は「モジュール活動」と呼び、15分間のモジュール（構成要素）を単位として実施する。学級活動の目的や内容に合わせてモジュール数を変えて活動できる。これによって、モジュール活動の時間配分に合理性と自由度が生まれる。モジュール活動は、学級活動（1）と学級活動（2）のねらいに沿った2種類の活動内容になり、それぞれモジュール活動A、モジュール活動Bと称す。学級担任は、学級活動（1）では児童とともに主体的な活動を支援することになり、学級活動（2）では教師と児童、児童相互の人間関係を築く活動を展開する。

(2) モジュール活動Aは学級活動（1）の実践を支える役割

モジュール活動Aは、前述した特別活動の課題である“活動時間の不足”を踏まえた提案である。表2の金曜日のモジュール活動Aは、学級活動（1）における活動時間の確保を意識している。学級活動（1）は「学級や学校の生活づくり」として位置づけられており、学級や学校における諸問題の解決をしたり学級内の組織づくりや仕事を分担したりすることになる。教育課程で決められた特別活動の時間は話し合い活動にあてることが多い。1時間の話し合い活動を行うためにはどのような学習課程と時間が必要になるかを理解しなければならない。

たとえば、学級活動（1）の公開授業⁸⁾から話し合い活動の学習課程と準備時間の現状を考える。公開の学級は話し合いのルールが定着しており、本時のねらいに迫る活発な発表が展開した。題材は「学級の絆を深めるための活動を計画しよう」で、学習指導案には「本時の活動までの経過」として次のように記載された。1時間の学級会（話し合い活動）のために、事前指導という「話し合い活動」が10日前から始まり合計6回開催された。その内訳は①計画委員会（議題の決定、計画委員の役割分担）②朝の会（議題と提案理由の報告）③朝の会（アンケートの実施）④朝の会（アンケート結果の報告）⑤帰りの会（学級活動ノートの記入）⑥計画委員会（進行計画と役割分担等）である。学級担任は、児童の主体的な学びを尊重し教師主導にならないように心がけた。具体的には、本時に至るまでの指導過程を①から⑥まで計画的

に展開させ、そのための時間を確保しなければならない。公開学級では、朝の会や終わりの会をアンケート調査などに有効活用しているが、まとまった時間を要する計画委員会は朝の会のような短時間では開催できない。仮に話し合いの時間を平均15分間確保すると、6回で90分になる。1単位時間は45分なので、授業時数に換算すると校時分になる。これは、学級活動（話し合い活動）を実施するまでの準備に2校時という教育課程外の時間を要することを意味している。学級担任は、その時間を捻出しなければならない。これは学級活動だけでなく特別活動（学校行事、児童会活動等）全体についても同様である。このように児童が主体的に活動している準備時間は、特別活動の時間数（35時間）として生活時程には明記されていないことを再認識しなければならない。モジュール活動Aの設置は、学級活動を支えるための時間を確保することになり、児童の主体的な活動を促進することになる。

さらに時間不足の実態は、学級活動の総時間数35時間内訳からも推測できる。横浜市の学習指導要領⁹⁾によると活動時間の目安を次のように示している。

ア 学級活動（１）「学級や学校の生活づくり」

（ア）学級や学校における生活上の諸問題の解決（年間15時間～20時間程度）

（イ）学級内の組織づくりや仕事の分担処理（年間3時間～5時間程度）

（ウ）学校における多様な集団生活の向上（年間2時間～5時間程度）

イ 学級活動（２）「日常生活や学習への適応及び健康安全」（年間6時間～10時間程度）

時間数だけでみると学級活動（１）では（年間20時間～30時間程度）、学級活動全体では（年間26時間～40時間程度）と幅がある。各学校は年間35時間を鑑み、学校の特色や実態を考慮して軽重をつけた学習課程を編成している。ただ、前述したように話し合い活動に至るまでの準備時間を考えると学級活動を支える計画的な時間が必要となる。さらに、高学年の児童は次のような3つの活動に参画することになる。①児童会の計画や運営（主に代表委員会にかかわる活動）②異年齢集団による交流（主に児童会集会活動）③学校行事への協力（主に委員会活動）。これらの活動時間は特別活動の領域であるが、教育課程に示された35時間には含まれていない。

以上の実態から考えると、表3の金曜日のモジュール活動Aは、自治的な活動を行う計画委員会が開催されたり行事の企画準備が展開したりする大事な時間となると理解できる。したがって、学級活動（１）「学級や学校の生活づくり」に係るモジュール活動Aは、児童の自治的な活動を定着させる時間としても確保しなければならない。

（３）モジュール活動Bは学級活動（２）の展開を充実させる役割

表2の火曜日と木曜日のモジュール活動Bは、学級活動（２）「日常生活や学習への適応及び健康安全」の活動の場として位置づけており、集団思考を生かした個人目標の自己決定を促すことになる。なかでも学級活動（２）のウ「望ましい人間関係の形成」における望ましい人間関係の態度形成や学級経営の円滑化を意識している。話し合い活動以外の活動では、望ましい人間関係を形成する指導として社会的スキルを身につけるための活動を効果的に取り入れ

ることを提案する。國分康孝¹⁰⁾は、問題行動が身体に起因するものを除いては、仲間や教師との「ふれあい体験」の乏しさ、グループの中での「居場所（所属感）」の乏しさに起因することから、「人間関係を育てること」の大切さを述べている。モジュール活動Bは、「ふれあい体験」「居場所（所属感）」を確かめあう場であり、人間関係を育てる時間として位置づける。それは児童の発達段階に応じ工夫された指導案をもとに実施され、各学年間の系統性と各学年の共通性を大切にすることになる。モジュール活動Bの設置は、「望ましい人間関係の形成」の達成だけでなく、それに取り組む教師の「協働体制や連携」も深まる。結果として、前章で述べた特別活動の課題のひとつである「指導力の格差」解消に影響を与えるものと考えられる。

（４）モジュール活動Bの展開例

モジュール活動Bは、学級活動（２）のウ「望ましい人間関係の形成」を中心に望ましい人間関係の態度形成や学級経営の円滑化に向けた体験的な活動を推進する。具体的には表２で示したように火曜日と木曜日に活動時間を確保することで、計画的にグループワークを導入することができる。グループワークの実施については、人間関係促進的技法の実践例¹¹⁾を参考に学級の実態や児童の発達段階を考慮して作成する。

まず、エクササイズを選ぶときの考え方とエクササイズの具体的な展開例を示す。

グループワークでは、与えられたエクササイズ（演習）を体験することで様々な気づきを共有することになる。エクササイズにはそれぞれのねらいがあり図１のように５つの領域と段階がある。「①感受性が高まる②自己理解・他者理解が深まる③信頼感が高まる④コミュニケーションの在り方を学ぶ⑤コンセンサス（集団決定）を学ぶ。」

グループワークは、エクササイズの領域や段階を意識して学級集団の変化に合わせて実施する。たとえば、学級始まりの段階は集団にまとまりがなく個人的な活動が多くなる。そのような状況では、緊張を緩和するようなエクササイズや他者理解を促すエクササイズを選択する。図１の段階①や段階②であり、集団のまとまりが必要な⑤コンセンサスを学ぶ段階にはならない。エクササイズの領域は、学級の集団過程にそって個人的な課題から集団的なものへと段階的に変化する。エクササイズのねらいは、学年の発達段階や学級目標、学期ごとのねらいに即して適切に決定する。

学級担任は、児童の様子を観察しながら学級の実態に合わせてそれぞれの領域からエクササイズを選び、指導案の立案する時に次の３つのことを確認する。「①児童の発達段階（低中高の各学年）②学年間の系統性（各領域の系統性）③指導の時期（各学期の集団過程）」

次に示す展開例は、図１で示し

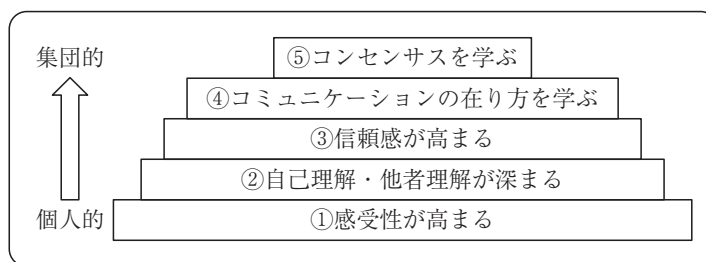


図１ エクササイズの領域段階（長谷川：1993）

た「①感受性が高まる」段階のエクササイズのひとつである「トントントーク」を取り上げる。対象は小学校の中学年から高学年で、形態は2人組である。ねらいは、次の2つを示している。

①軽く触れ合うことを体験することで、リラックスして会話することのよさに気づく。②「ノンバーバル（無言）」で体験すると、どのような気持ちになるかをふりかえる。時間は、15分間の予定である。

表3 エクササイズ「トントントーク」の展開例

活動の流れ	時間	活動内容	留意点
ねらい	2分	・ねらいを話す。「トントントークを始めます」 「今日も気持ちを落ち着けて、心の学習をしよう」	・言葉がけで肯定的な雰囲気をつくる。 ・ねらいをわかりやすく明確に示す。
エクササイズ (演習)	10分	1) 流れを説明する。 ①ジャンケンで負けた人は後ろに立ち、勝った人の肩をトントンと優しくたたく。 ②トントンしながら、最近あった楽しい話をする。 ③勝った人は、うなずきながら聞く。 2) 教師がモデルになり代表の児童と一緒に示す。 3) それぞれのペアで始める。 (話し方、聞き方の表情が豊かな児童) (話す内容を考え、表現できる児童) 4) 役割を交代する。	・やり方がわからない児童を減らすように、説明の仕方を工夫する。 (流れや方法の掲示など) ・教師がモデルになり、代表の児童と一緒に説明する。 ・全員の参加になるよう、気になる児童については不安感を取り除くような言葉がけをする。 ・机間巡視しながら肯定的なかかわりをする。
シェアリング (振り返り)	3分	1) 自分自身で感じたことを振り返る。 (「ワークシート」を活用してもよい) 2) 相手の感じたことを聞く。 3) 二人で気づいたことをまとめる。 4) 全体で発表する。	・話し合い時間を示してから始める。 ・肯定的な言葉を大切にする。 ・ワークシートを書かせたときは、ポートフォリオにする。 ・教師の振り返りや思いを語る。

活動の流れの“エクササイズ”でどのようなテーマを話すかは、大事な選択である。学校生活の身近な内容が適切で「最近あった楽しい話」のような肯定的な雰囲気を醸し出す内容がよい。シェアリングの場面で学年によっては、エクササイズで感じたことを「ワークシート」で記入させるほうがよい場合がある。発達段階を考慮すると、2通りの学習展開が考えられる。ひとつは「ワークシート」の記入とシェアリングを15分の時間内で終了できる内容を選ぶ。もうひとつは、2日間のモジュール活動Bを使い話し合い活動を十分にとる場合である。1回目は、エクササイズの体験と「ワークシート」を記入させる。2回目は「ワークシート」をもとに振り返り、ペアやグループでシェアリングを行う。指導案の後半部分（シェアリング）を話し合い活動に焦点化し、ねらいに向けてより深める。このようにモジュール活動Bは「1課題1モジュール制」と「1課題2モジュール制」としてねらいや実態により柔軟に展開することができる。ただ、この選択は指導の力量や経験が少ないとなかなか難しい判断のひとつである。モジュール活動Bにおける指導内容の質を向上させるためには、児童の実態を観察したりアンケートで意識調査したりして客観的なデーターを参考にすることになる。いずれにしても教師は、児童の観察やワークシートの評価に基づき指導過程を編成したり指導案を作成したりして学級の実態にあった指導を展開する。

このような実践が繰り返し行われると、学年団（教師集団）は意思疎通を図りながら指導技術を高め合う関係になる。そこに校内研修での情報交換やスクールカウンセラーなどの支援があれば、さらにより指導環境が整うことになる。このようにチームとしての協働作業が進むと、教師の指導力は高まり、指導格差も少なくなると考える。

おわりに

現行学習指導要領の目標にある「望ましい集団活動」とは、集団を構成する一人一人が互いのよさや可能性を発揮できる活動のことである。集団活動のなかで互いのよさや可能性が発揮されることにより、それらの資質・能力が育まれ、さらによりよい集団活動を実施しようとする力になる。自治的な集団には、よりよい生活や人間関係を築こうとする実践的な態度が育っている。それらは全て「なすことによって学ぶ」という特別活動の学習プロセスや活動時間が保障されることによって達成できるものである。特別活動の現状から「活動時間の不足」と「指導力の格差」の2つを課題としてとりあげた。それぞれの課題について学校が教育課程を工夫し解決に向けるという試案である。ひとつは、「活動時間の不足」を補う生活時程上の工夫であり、特別活動の補完的な役割を担う「フレキシブル・アワー」の設置である。もうひとつは、「指導力の格差」を少なくする方策のひとつで、学級活動を支えたり教師の指導力を高めたりする「モジュール活動」の実施である。

教育課程は、学校教育の目標を達成するために児童の発達段階を考慮し、授業時数との関連において総合的に組織した教育計画である。その編成の主体は、それぞれの学校にある。本試案を具現化するためには、「教科・特別活動の横断的な視点」「教育活動の改善点」「学校裁量時間の在り方」など教科や学年の枠を越えた議論から始まり、教育課程全体を通した取組や学校組織運営の改善まで求められる。学校は、昨年までの編成内容を踏襲するだけでなく、様々な課題を把握し現状にあった生活時程を工夫することになる。実施段階では、「計画（教育課程の編成）→実施→評価→改善」という一連のPDCAサイクルを確立して、実践的研究を積み重ねながら、教育活動を定着させなければならない。

また、本試案を実施するために、次のような内容項目の研修を考えている。①年間計画やカリキュラムのマネジメントに関する研修②「チーム学校」とコミュニケーションに関する研修③教師一人一人の力量を高める参加・体験型の研修④「アクティブ・ラーニング」など新たな指導方法に関する専門的な研修⑤指導の成果や各学年における状況に関する情報共有の研修である。これらの研修を通して、教員の指導力向上を図るとともに一人一人の児童を観て理解する力と集団を俯瞰して判断する力をつけることになる。そして、チーム学校としての取組が進展し、児童の主体的な活動が展開することで、提案した「フレキシブル・アワー」や「モジュール活動」が充実した活動になることを期待している。

この一試案が、特別活動の課題を解決する方策のひとつになるように実践的研究を重ねたい。

引用文献

- 1) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（2010）『豊かな心をはぐくむ教育の在り方に関する専門部会に係る意見』文部科学省
- 2) 全国連合小学校校長会報告書（2015）『平成26年度研究紀要』全国連合小学校校長会
- 3) 日本特別活動学会研究開発委員会（2014）『特別活動の改善に関する調査報告書～調査結果に基づく提言～』特別活動学会
- 4) 文部科学省（2016）『楽しく豊かな学級学校生活をつくる特別活動』国立教育政策研究所
- 5) 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 特別活動編』東洋館出版社
- 6) 長谷川重和（2013）『異年齢集団活動を導入した多彩な活動時間の確保について』日本特別活動学会紀要
- 7) 有村久春（2014）『これからの特別活動の在り方や改善の方向を考える』日本特別活動学会研究開発委員会特別活動学会
- 8) 大阪市立関目小学校（2016）「学級の絆を深める活動を計画しよう～5・2 絆計画」日本特別活動教育学会近畿支部、担任：吉田慶子教諭
- 9) 横浜市教育委員会（2009）『横浜版学習指導要領 特別活動編』ぎょうせい
- 10) 國分康孝・國分久子（2013）『10分でできるなかよしスキルタイム』図書文化
- 11) 内藤勇次（1993）「学級改善とスクールリーダー 8 『生きる力を育てる』」東洋館出版

参考文献

文部科学省（2010）『生徒指導提要』教育図書